

日本人学生と中国人学生の文化的アイデンティティと 国際感覚に関する一考察

一二三 朋 子

問題と目的

問題の背景

20世紀, 科学技術・交通手段・通信技術の飛躍的發展に伴い, 人・物・情報の国際移動が急速に活発になり, 異文化接触の機会も増大した。また, 情報の共有により, 各国・社会の国際化・均一化・相互依存関係が進む反面, 地方化・民族化の動きが高まり, 世界各地で民族運動や民族紛争が多発している。異文化接触の機会の増大や, 国際化と地方化という相反する動きは, 人々の国際感覚やアイデンティティにどのような影響を与えるのだろうか。

Tajfel (1978) は社会的集団への所属意識を社会的アイデンティティとして, 個人的アイデンティティと区別し, その所属意識が個々人に肯定的自己概念を与えると考えた。人は自分が所属する社会的集団 (以下, 内集団) を自己概念の源泉としている。内集団の成員であることを強く意識させられる場合には, 自己概念の中の社会的アイデンティティが優勢になる。こうした状況下では, 個々の成員の個人的特徴よりも集団の特徴に沿った行動を取る。内集団の評判が低ければ, 自己概念を肯定的に保つことが難しくなるので, 内集団の評価や社会的アイデンティティを維持・高揚しようとする動機が高まり, 内集団の仲間をひいきする内集団びいきなどの現象が発生する。

肯定的自己概念・自己の存在証明を得るために, 人は4つの方法でアイデンティティを管理しているとされる。第1の方法は, 否定的に評価されそうなアイデンティティを隠すこと, 第2の方法は威信の高い集団に加入したり, 能力や資格を身に着けること, 第3の方法は, 否定されてきた自分の社会的アイデンティティの価値を反転させ, 自己意識の変革を試みること, 第4の方法は他者を差別し, 自己のプラス価値を相対的に操作することである (石川, 1992)。

一二三 (2008a, 2008b) は, 中国人留学生, 日本人留学生を対象に, 自文化に対するホスト国の人間の評価が文化的アイデンティティに与える影響を調

査し、肯定的評価も否定的評価も共に、文化的アイデンティティを高めることを報告している。さらに、文化的アイデンティティと自尊感情とが密接に関わっていることを見出している。これは、ホスト国からの否定的評価により低下しそうになる自尊感情を回復するためには、自文化への愛着・誇りを強めることが重要であることを示唆するものであり、Tajfel (1978) の社会的アイデンティティ理論とも一致する。

このように、文化的アイデンティティは肯定的自己概念にとって重要なものであるが、肯定的自己概念を保障するために、自文化への愛着・帰属感が過剰になり、自文化への極端な偏執となったとき、自民族優越主義や異文化への差別感、さらには自分以外の国・民族・文化・宗教などへの排他的態度といった反国際的態度に結びつく危険性が予測される。自己の存在価値を証明できないとき、人は差別的になるという。アイデンティティ管理の方法として一番心理的コストが小さいからである (箕浦, 1995)。

では、文化的アイデンティティは差別感につながり易く、国際感覚と相反するものなのであろうか。

一二三 (2008a, 2008b) では、中国人留学生・日本人留学生の文化的アイデンティティの構成要素である自文化や自文化の歴史への興味・関心・探索が、ホスト国文化への積極的受容を促すことを明らかにしている。これは、文化的アイデンティティが異文化・自国以外の国・民族などへの寛容性を育む可能性を示唆するものといえよう。

これまでも、異文化接触の影響として、文化相対主義の獲得や国際主義的態度の確立といった効果が多く指摘されている (星野, 1994)。異文化接触により多様なものの見方・考え方を知ること、大局的な見地から自文化を見直したり、自国の利益だけを追求するのではなく、貧しい国とも富や資源を分かち合うべきだといった国際主義的態度を身に着ける可能性も期待できよう。

本稿では、日中の大学生を対象に、文化的アイデンティティと国際主義的態度との関係を検討する。文化的アイデンティティは国際主義的態度と相反するものなのか、それとも国際主義的態度を促進するものなのか。そこに、異文化接触はどのような影響を与えるのか。青年期の留学は文化的アイデンティティを鮮烈に意識する異文化接触体験である (大野, 1990)。留学により、文化的アイデンティティや国際主義的態度はどのように変化するのであろうか。

また、日本人の異文化接触の機会が増大する中で、日本人のアイデンティティを異文化接触と関連付けて研究する重要性が指摘されている (新井, 1995)。

一二三 (2008a, 2008b) は、中国人及び日本人の留学生を対象に、本国の大学生との比較を通して留学が文化的アイデンティティに与える影響を検討しているが、これらは国別の分析と考察であった。そこで本稿では、日本人大学生と中国人大学生とを比較することで、国による特徴を明らかにすることも試みる。尚、文化的アイデンティティと肯定的自己概念とは密接に関連するものと考えられる。近年、日本の若者の中に、自分が嫌いで自分に自信を持っていない者が増えているという。本稿では、肯定的自己概念に関しても日中の比較を行い、さらに、文化的アイデンティティとの関連も考察して、その様相の一端を検証してみたい。

目的

以上を整理すると、本稿の目的は以下の3点である。

- (1) 文化的アイデンティティ・国際主義的態度・肯定的自己概念の関係
- (2) 文化的アイデンティティ・国際主義的態度・肯定的自己概念に関する日中の大学生の相違
- (3) 文化的アイデンティティ・国際主義的態度・肯定的自己概念に与える留学経験の影響

(1)については、文化的アイデンティティの各構成要素と国際主義的態度・肯定的自己概念とが互いにどのように関連しているのかを、相関分析により検討する。(2)(3)については、日本と中国という国の影響及び留学経験の影響を検討するために、文化的アイデンティティ・国際感覚・肯定的自己概念を従属変数とし、国籍要因×留学経験要因による分散分析を行う。

方 法

被調査者 日中の学生の内訳は以下のとおりである。

① 日本人留学生

中国の大学(3大学)で学ぶ113名(男性59名, 女性54名, 平均年齢21.5歳, 平均滞日期間25.5ヶ月)

② 日本人本国学生

日本国内の大学で学ぶ180名(男性55名, 女性125名, 平均年齢18.8歳)

③ 中国人留学生

日本の大学(10大学)で学ぶ166名(男性74名, 女性92名, 平均年齢24.1

歳，平均滞日期間25.2ヶ月)

④ 中国人本国大学生

中国本国の大学（3大学）で学ぶ149名（男性34名，女性114名，不明1名，平均年齢22.2歳）

中国人大学生（留学生・本国学生）に関しては，実際はもっと多くの学生からの協力を得たが，今回は漢民族に限定して分析を加えた。

質問紙構成 本稿で分析に用いる質問項目は以下の通りである。

- 1) 文化的アイデンティティ 17項目
- 2) 自国・自国の人間への同一視 5項目
- 3) 国際主義的態度 6項目
- 4) 肯定的自己概念 10項目

1) については Phinney (1992) の Multigroup Ethnic Identity Measure (以下，MEIM) を参考にした。2) については，Karasawa (1991) の集団同一視尺度7項目版(堀・吉田，2001)を参考にし，留学先にも本国学生にも内容が妥当なものを選んだ。3) については，Karasawa (1994) の国民意識尺度(堀・吉田，2001)のうち，「国際主義」を測定する項目を参考にした。4) については，山本・松井・山成(1982)の自尊感情尺度(堀・山本，2001)を参考にした。尚，1)，4) は，一二三(2008a，2008b)と同様の質問項目である。回答は全て5段階評定である。

調査時期 質問紙の配布・回収時期は2006年5月から10月までである。

分析 まず，各概念の構造を検討するために，質問紙の1)～4)について固有値1.0以上とした因子分析(主因子法，バリマックス回転)を行なう。次に，各因子を構成する項目から尺度得点を算出し，相関分析及び分散分析を行う。

結果と考察

各構成概念の構造

因子分析の結果を以下にみていく。分析に際し，日本人学生のみ，中国人大学生のみで因子分析を行って比較し，また，1)，4)については一二三(2008a，2008b)とも比較し，いずれもほぼ同様の結果であることを確認したうえで，両者を合わせて因子分析を行った。

「文化的アイデンティティ」に関しては，3つの因子が抽出され，それぞれ「自文化への愛着・誇り(以下，愛着)」「自分のルーツへの興味・関心・探索

(以下、探索)」「自文化の保持・継承(以下、継承)」と命名した(TABLE 1)。

TABLE 1 文化的アイデンティティ

	因子		
	愛着	探索	継承
自文化や〇〇(日本・中国)人であることをすばらしいと感じる	.778	.248	.287
自国・自国の人への強い愛着	.749	.257	.297
自文化や〇〇(日本・中国)人であることの誇り	.714	.384	.255
〇〇(日本・中国)人であることを幸せに思う	.672	.211	.210
自国・〇〇(日本・中国)人への強い帰属意識	.585	.465	.217
自分の子どもへの〇〇(日本・中国)人としての誇りの継承	.582	.300	.497
自国の伝統料理・音楽・文化を大切に感じる	.518	.262	.405
〇〇(日本・中国)人であることの意味の理解	.279	.779	.112
他国との関係からの〇〇(日本・中国)人であることの意味の理解	.301	.740	.167
〇〇(日本・中国)人であることが人生に与える影響を考える	.211	.524	.137
自国をより深く知るために他の自国の人からの話を聞く	.167	.498	.292
〇〇(日本・中国)人であることが人生に果たす役割がわからない	-.186	-.393	-.108
自国の歴史・伝統・習慣を知るために勉強	.053	.337	.212
自分の子どもへの歴史・伝統文化教育	.315	.266	.844
自分の子どもへの自国語・伝統・文化・習慣の継承	.358	.205	.796
自国語はとても大切	.386	.216	.406
自国の文化・歴史について多くを学ぶために努力したい	.288	.279	.398

「自国・自国の人間への同一視」に関しては1元性が確認され、「同一視」と命名した(TABLE 2)。

TABLE 2 自国・自国の人間への同一視

	因子
	同一視
「あなたは典型的な〇〇(日本・中国)人」と言われると嬉しい	.895
「あなたは典型的な〇〇(日本・中国)人」という表現は適切	.849
自国・自国の人への強い愛着	.582
「私は〇〇(日本・中国)人だなあ」という実感	.375
自分の考えや行動に影響を与えた自国の人はいくらいる	.274

「国際主義的態度」に関しては1元性が確認され、「国際感覚」と命名した (TABLE 3)。

TABLE 3 国際主義的態度

	因 子
	国際感覚
我国にとって外来文化を積極的に取り入れることはプラスだ	.653
我国は政治的利益に関係なく、苦しんでいる国に積極的に援助すべきだ	.593
我国は外国に対してもっと門戸を開放すべきである	.517
我国から外国籍企業は排除すべきだ	-.495
他国の貧困の緩和は我国とは無関係である	-.477
我国は諸外国から学ぶことが多い	.169

「肯定的自己概念」に関しては2つの因子が抽出され、それぞれ「自己有能感 (以下, 有能感)」「自己肯定感 (以下, 肯定感)」と命名した (TABLE 4)。

TABLE 4 肯定的自己概念

	因 子	
	有能感	肯定感
私はいつも自分が役に立たない人間だと思う (R)	.805	.070
私はいろいろな良い素質を持っている	.754	.210
私は物事を人と同じくらいにはうまくやれる	.712	.190
私は敗北者だと思うことがある (R)	.631	.091
私は他の人と同じくらい価値ある人間である	.604	.261
私には自慢できることがあまりない (R)	.592	.116
私は全くだめな人間だと思うことがある (R)	.499	.043
私は自分をもっと尊敬できるようになりたい	.267	-.135
私は自分に満足している	.058	.846
私は自分はこれでいいと思う	.194	.725

※ (R) は反転項目

尺度得点の算出

因子負荷量が.30以上のものを尺度項目とする各尺度のクロンバックの α 係

数を求めたところ、.68～.92であり、十分な内的整合性を有することが確認された。各尺度の構成項目の合計得点を項目数で除したものを尺度得点として以下の分析を行う。尚、「肯定的自己概念」のうち「肯定感」に関しては、因子を構成する項目が2項目しかないので、今回の尺度からは除外した。尺度得点の平均値と標準偏差をTABLE 5に示す。

TABLE 5 各尺度得点の平均値・標準偏差

従属変数	留学経験	国籍	
		日本	中国
愛着 $\alpha = .92$	留学生	3.62(1.00)	4.35(.66)
	本国学生	3.70(.81)	4.53(.58)
探索 $\alpha = .78$	留学生	2.94(.80)	3.56(.62)
	本国学生	2.74(.70)	3.79(.63)
継承 $\alpha = .82$	留学生	4.01(.93)	4.31(.68)
	本国学生	4.09(.74)	4.52(.52)
同一視 $\alpha = .77$	留学生	3.07(.90)	3.71(.77)
	本国学生	3.12(.81)	3.90(.77)
国際感覚 $\alpha = .68$	留学生	3.73(.66)	4.15(.62)
	本国学生	3.56(.51)	4.10(.52)
有能感 $\alpha = .85$	留学生	3.26(.81)	3.75(.63)
	本国学生	3.03(.78)	3.93(.58)

() 内は標準偏差

文化的アイデンティティと国際感覚との相関

文化的アイデンティティと国際感覚との関係について見ていく。日本人学生についてはTABLE 6，中国人学生についてはTABLE 7に，相関係数をまとめる。

TABLE 6とTABLE 7より，対照的なのは，日本人学生は文化的アイデンティティと国際感覚に有意な相関がないのに対し，中国人学生は，弱いながらも有意な相関が見られることである。また，「有能感」と有意な相関が見られるのは，日本人学生の場合「愛着」「探索」だけであるが，中国人学生の場合は「愛着」「探索」「継承」「同一視」「国際感覚」の全てと有意な相関が見られた。これらのことから，次のことがいえよう。

TABLE 6 相関係数 ー日本人学生ー

本国学生 留学生	愛 着	探 索	継 承	同一視	国際感覚	有能感
愛着		.518**	.671**	.679**	-.114	.211**
探索	.424**		.521**	.357**	.017	.225**
継承	.741**	.487**		.499**	.087	.146
同一視	.759**	.311**	.505**		-.170	.084
国際感覚	.064	.118	.156	.051		-.047
有能感	.206*	.210*	.165	.056	.081	

* p<.05 ** p<.01

TABLE 7 相関係数 ー中国人学生ー

本国学生 留学生	愛 着	探 索	継 承	同一視	国際感覚	有能感
愛着		.611**	.704**	.574**	.161*	.283**
探索	.581**		.631**	.511**	.179*	.306**
継承	.771**	.564**		.489**	.190*	.205*
同一視	.599**	.510**	.624**		.200	.186*
国際感覚	.399**	.309**	.395**	.331**		.314**
有能感	.372**	.284**	.373**	.199*	.215**	

* p<.05 ** p<.01

日本人学生の文化的アイデンティティと国際感覚とには有意な関係が見出せない。自文化へのアイデンティティを強く意識することが他国への関心に向かわず、自国・自文化への愛着・関心にとどまっている様子が推測される。これは、日本が島国であることも関係しているのかもしれない。近年まで、他国からの攻撃や侵略の危機にさらされることも少なく、異文化と自文化との違いを日常的に突きつけられることも少なかった日本人の歴史的背景が、他国と自国との関係や付き合い方を身近なものとして考える習慣を育ててこなかったことが1つの原因として推察される。ときに平和ボケとも評される日本人の、他国への無関心さの一端を表すものとも考えられよう。

また、有能感に関しては、自国の人間への同一視との相関は見られなかった。自分は日本人であるという自覚が肯定的自己概念と結びつかないことがわか

る。日本人は欧米コンプレックスが強いことはよく指摘されることである。また、日本人は他国からの評価を常に気にしており、他国からの評価によって自国への評価が左右される傾向がある。こうした精神的風土では、自分が日本人であることの自覚・認識が肯定的自己概念を培うことは難しいといえよう。

中国人学生の場合、自文化へのアイデンティティや自国の人間への同一視が強くなるほど、他国との協調関係を重視する国際感覚も強まることが伺える。文化的アイデンティティは排他的な自民族優越主義や他国への無関心を助長するのではなく、文化相対主義の確立や国際感覚の育成に寄与することが期待される。

また、有能感と文化的アイデンティティ・中国人への同一視とが相互に関連し合っている。社会的アイデンティティが肯定的自己概念の源泉であるというTajfel (1978) の説と合致した結果である。また、有能感は国際感覚とも、弱いながらも有意な相関が見られる。他国への積極的支援や開放的態度が有能感を高めていると考えられる。これらのことより、中国人学生の有能感是多面的な精神的基盤によって支えられていることが推測される。

国籍要因と留学要因の影響

次に、国籍及び留学経験の影響を見ていく。尺度得点を従属変数として、国籍要因×留学経験要因による分散分析を行った。分散分析結果 (TABLE 8) と、交互作用のみられたものに関しては単純主効果を検定した結果を以下に示す (TABLE 9)。

(1) 文化的アイデンティティ

文化的アイデンティティに関わる「愛着」「探索」「継承」「同一視」のいずれも中国人学生のほうが、日本人学生よりも有意に高いことが示された。中国人学生は日本人学生よりも文化的アイデンティティが強く、自文化への愛着や誇り、自文化への帰属感、自国への同一視の程度が高いことがわかる。これに対し、日本人学生は、自文化への愛着や誇り、興味や関心が希薄である。

また、日本人も中国人も共に、「愛着」「継承」「同一視」に関しては留学生よりも本国学生のほうが有意に高かった。留学することが文化的アイデンティティを高めるのではなく、逆に文化的アイデンティティを弱めている。言い換えれば、自文化だけをすばらしいと思う優越感・排他主義を弱め、文化相対主義を身につけていく過程とも考えられる。ただし、今回の調査は横断的なものであり、同一の被調査者の時間的変化を追ったものではない。留学生たちがも

TABLE 8 分散分析の検定結果

従属変数	国籍要因 F(1,604)	留学要因 F(1,604)	交互作用 F(1,604)
愛着	152.43*** 日本<中国	4.26* 留学<本国	.57
探索	219.66*** 日本<中国	.04	14.87***
継承	37.19*** 日本<中国	5.48* 留学<本国	1.19
同一視	114.82*** 日本<中国	3.08† 留学<本国	.86
国際感覚	104.94*** 日本<中国	5.07* 留学>本国	1.67
有能感	145.96*** 日本<中国	.21	12.79***

† p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

TABLE 9 単純主効果の検定結果

従属変数	国籍要因の単純主効果		留学要因の単純主効果	
	留学生	本国学生	日本人学生	中国人学生
探索	52.17*** 日本<中国	201.71*** 日本<中国	5.35** 留学>本国	10.50** 留学<本国
有能感	32.25*** 日本<中国	138.33*** 日本<中国	6.02* 留学>本国	6.95** 留学<本国

† p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

ともと文化的アイデンティティの低かった可能性があることにも注意を要しよう。

尚、単純主効果の検定結果より、「探索」に関しては、日本人学生は留学生のほうが本国学生より高かった。留学することが刺激となり、それまで無関心だった自国の文化・歴史・伝統などに関心を高めることが推察される。

(2) 国際主義的態度 (国際感覚)

国際感覚については日本人学生よりも中国人学生のほうが高い。日本人学生は全般的に海外と日本との関係に対する関心が薄いのに対し、中国人学生は海

外への関心が高く、他国との協調関係を重視しているといえよう。また、本国学生よりも留学生のほうが有意に高かった。留学することにより、異文化接触を体験する中で、異文化の人の考えを知り、異文化の立場から自国や世界を捉え直す体験が、文化相対主義的態度や国際感覚を養うことが推測される。

(3) 肯定的自己概念(有能感)

有能感については中国人学生のほうが日本人学生よりも有意に高い。先にも見たように、中国人学生の有能感は文化的アイデンティティや国際感覚と相互に関わり合っていた。言い換えれば、中国人学生の有能感はさまざまな精神的基盤と有機的に関連し合っており、安定したものであることが推測される。これに対し、日本人学生は自国の人間に対する誇りが希薄であり、有能感が文化的アイデンティティに負うところは少ないことが示されていた。中国人学生に比べて有能感が低いのは、その根拠とする精神的基盤の脆弱さを表しているのかもしれない。

また、単純主効果の検定結果より、日本人学生は、留学生のほうが本国学生よりも有能感が高く、中国人学生は逆である。日本人学生は留学することで親から自立し、生活面・学業面での問題を自力で克服していくことで、有能感を高めることが推察される。一方、中国人学生の場合は逆の現象が見られる。留学し、日本で生活する中で、住居やアルバイトの問題など自己の力では解決しえないさまざまな困難に遭遇し、挫折感を味わいながら、自信を喪失していくのであろうか。生活面・経済面での困難さという点では、日本から中国に留学するよりも、中国から日本に留学するほうが、遥かに難しい。そうしたことが、自己の有能感にマイナスに影響する可能性は否定できまい。

ま と め

教育的示唆 本稿では、日本人学生及び中国人学生を対象に、文化的アイデンティティと国際感覚との関係を検討し、さらに、国籍及び留学経験の影響を考察した。その結果、中国人学生の場合、文化的アイデンティティと国際感覚とは関連があるのに対し、日本人学生の場合、両者の間には関係がないことが示された。また、文化的アイデンティティ・国際感覚・肯定的自己概念のいずれも、中国人学生の方が日本人学生よりも高いことが示された。以上の結果から、次のような教育的示唆が得られよう。

第1に、日本人学生に対する、文化的アイデンティティを高める教育の重要

性である。本研究の調査から、日本人学生の文化的アイデンティティ及び肯定的自己概念は中国人学生のそれより低いことが明らかになった。また一二三(2008b)より、自文化への愛着・誇りは自己有能感を高めることが示されていた。文化的アイデンティティの低さが肯定的自己概念の低さの唯一の原因であるとはいえないが、その一因であることは否めまい。日本では戦後、愛国心を育てる教育を忌避し、逆にそれらを持たせないことを是とする教育的態度が隆盛だった感がある。日本人学生の自信や有能感を培うために、自国・自文化への誇りや帰属感を育み、多面的にそれらを支援する教育が求められよう。

第2に、日本人学生の国際感覚を養う教育も重要である。日本国内に在住する外国人が増え、多文化共生の問題は今後ますます重要な課題になっていくであろう。その際、海外との関係の中で日本が果たすべき役割を意識し、他国とどのような協調関係を築いていくかに対する感覚を鋭敏にしていくことが急務である。また、そうした国際感覚に裏打ちされた文化的アイデンティティこそが文化相対主義的態度の形成に寄与するのではないだろうか。

第3に、中国人留学生の有能感が、本国の中国人学生よりも低いことにも注意を向けたい。日本人学生の場合、留学生のほうが有能感が高かったが、それは留学生生活の中でさまざまな困難を克服していくことから得られた自信によると思われる。これに対し、中国人は留学することで逆に有能感を低めている。中国人が日本に留学することは、日本人が中国に留学するよりも、経済的な面からだけでも、遥かに困難なことである。物価の高さ、住居の問題、アルバイトと学業との両立の難しさなどにより味わう挫折感・無力感が、自信や有能感を損なわせることは想像に難くない。本研究での調査対象者は中国人留学生のごく一部に過ぎないが、調査結果は日本における海外からの留学生の現状の一端を反映したものといえよう。中国人留学生に限らず、海外からの留学生を受け容れる態勢をさらに見直すことが必要であろう。

今後の課題 本研究では日本人学生と中国人学生を対象に、文化的アイデンティティと国際感覚を中心に考察してきた。しかし、調査が横断的であり、留学生と本国学生との相違をそのまま留学の影響と考えることはできない。また、被調査者の平均年齢が異なることも結果に影響を与えた可能性がある。今後は同一の被調査者の縦断的調査が必要となろう。また、対象の国を中国以外に広げていくことも必要である。今後の課題としたい。

参考文献

- 新井郁男 1995 日本人の異文化接触とアイデンティティ 異文化間教育, 9, 37-51.
- 原裕視 1995 異文化接触とアイデンティティ 異文化間教育, 9, 4-18.
- 一二三朋子 2006 異文化接触と親の教育方針がエスニック・アイデンティティ及び自尊心に与える影響－日本人学生と中国人留学生の場合－ 文藝言語研究言語篇, 49, 61-81.
- 一二三朋子 2008a 留学が中国人学生の文化的アイデンティティに与える影響に関する一考察－中国人留学生と中国本国の学生との比較を通して－ 文藝言語研究言語篇, 53, 61-81.
- 一二三朋子 2008b (印刷中) 地域研究, 28.
- 堀洋道・山本真理子 (編) 2001 心理測定尺度集Ⅰ サイエンス社
- 堀洋道・吉田富士雄 (編) 2001 心理測定尺度集Ⅱ サイエンス社
- 袈岩ナオミ 1986 メタ的な生き方のすすめ 青年と医学, 34, 51-56.
- 井上孝代・伊藤武彦 1995 来日一年目の留学生の異文化適応と健康－質問紙調査と異文化間カウンセリングの事例から－ 異文化間教育, 9, 128-142.
- 石川准 1992 アイデンティティ・ゲーム 新評論
- Karasawa, M. 1991 Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, 30, 293-307.
- Karasawa, M. 1994 Nationalism, internationalism, and patriotism among Japanese college students: A factor-analytic approach. *Bulletin of Faculty of Letters (Aichi Gakuin University)*, 23, 25-33.
- 箕浦康子 1995 異文化接触の下でのアイデンティティ－理論枠組構築の試み－ 異文化間教育, 9, 19-36.
- 大野裕 1990 若者の留学体験 青年心理, 84, 45-49.
- Phinney, J.S. 1989 Stages of ethnic identity development in minority group adolescents. *Journal of Early Adolescence*, 9, 34-49.
- Phinney, J.S. 1991 Ethnic identity and self-esteem: A review and integration. *Hispanic Journal of Behavioral Science*, 13, 193-208.
- Phinney, J.S. 1992 The Multigroup Ethnic Identity Measure: A new scale for use with diverse groups. *Journal of Adolescent Research*, 7, 156-176.
- 鈴木康明・井上孝代 1995 異文化間カウンセリング 渡辺文夫 (編) 異文化接触の心理学 川島書店 Pp. 159-168.
- Tajfel, H. (Ed.) 1978 Differentiation between social groups: Students in the social Psychology of intergroup relations. London: Academic Press.
- 鏑幹八郎・宮下一博・岡本祐子 (編) 1997 アイデンティティ研究の展望Ⅳ ナカニシヤ出版
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 山崎瑞紀・平直樹・中村俊哉・横山剛 1997 アジア系留学生の対日態度及び対異

文化態度形成におけるエスニシティの役割 教育心理学研究, 45, 119-128.